

メッセージ「もらうより、分け合う方がよい」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 20章 17-35節

今回のお話は、パウロがエフェソの教会の長老たちに対して行ったお別れの言葉でした。しかも、パウロ自身がエフェソの町に出向いて行って告げたのではなく、数十キロ離れていたエフェソからミレトスまで、長老たちを呼び寄せて会ったということでした。なぜなら、直前の 16 節にある通り、「できれば五旬節（ペンテコステ）にはエルサレムに着いていたかったので、旅を急いだから、エフェソには寄らないで航海することに決めていた」からでした。

では、パウロは何を急いでいたのでしょうか。しかも、「私は霊に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、投獄と苦難とが私を待ち受けているということだけは、聖霊がはっきりと告げてくださっています」（22-23）と言うくらいですから、エルサレムでは良いことが待ち受けているどころか、命を落とすかもしれない、という緊迫した状況でもありました。それにもかかわらず、彼が「霊に促されて」（22）、つまり使命感に突き動かされていた理由の一つは、エルサレムの教会に各地の教会からの献金を届けなければならない、という具体的な目的があったからだと考えられています。

パウロがエフェソに滞在中に書き送ったと考えられている「コリントの信徒への手紙Ⅰ」16 章 1-4 節には、「聖なる者たちのための募金については、～私がそちらに行ってから募金が行われるようなことがないように、週の初めの日ごとに、各自収入に応じて、幾らかでも手元に蓄えておきなさい。そちらに着いたら～その贈り物をエルサレムに届けさせましょう～」と書かれています。つまり、エルサレムの教会を支援するために、コリントの教会の人たちに対して、常日頃から献金を集めておくようにと連絡していたわけです。

また同じく「コリントの信徒への手紙Ⅱ」9 章にも、「聖なる者たちの欠乏を補う奉仕の業」（12）という形で、「各自、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです」（7）などと言って、献金への協力を依頼し、励ましている言葉があります。その他、コリント滞在中に書き送られた「ローマの信徒への手紙」15 章には、「マケドニアとア

カイアの人々が、エルサレムにいる聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意した」(26)とあり、財政的に困窮していたエルサレムの教会を助けるために、各地の教会で集められていた献金を届ける必要があり、そのためにパウロはエルサレムへと急いでいたということが分かります。

エルサレムの教会は、ペンテコステに聖霊が下って教会が誕生した、教会発祥の地でもありましたが、同時にエルサレムは依然としてユダヤ教の中心地でしたので、当然のこととして、周囲からの圧力や嫌がらせ、迫害なども多かったのだろうと思われます。しかし、そのエルサレムから教会は始まり、福音はユダヤ人だけではなく外国の地に住む異邦人の人たちにまで広く告げ知らされていきましたから、「ローマの信徒への手紙」15章27節にて「異邦人が彼ら(エルサレムの教会)の霊のものにあずかったのであれば、肉のもので彼らに仕える義務があります」と言われている通り、「教会発祥の地であるエルサレムの教会の貧しい仲間たちを、世界各地の教会から応援しよう、そのために献金を集めて送り届けよう」ということが広く行われていたというわけです。パウロはそう呼びかけ、そして実際にお金を送り届ける最中でした。

そのような背景の中での、ミレトスの町でのエフェソの「長老」たち、今の教会でいえば「役員」さんたちのような、教会の中心メンバーたちに対するパウロの最後のお別れの言葉であったわけです。「これで今後もう二度と会うことはないでしょう(25)。しかし、私が今までいつもしてきたように、これからも誤った教えや考えに惑わされてしまわないように、しっかりと目を覚まして、エフェソの地で頑張って行きなさい(29-31)」というような内容でした。そして最後に記されているのが「私がいつも身をもって示してきたように、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すように、労苦して弱い者を助けなさい」(35)という言葉です。

しかし、ここで「あれっ」と不思議に思うわけです。確か、パウロは十字架につけられる前のイエス様とは一緒に行動していなかったはずですが、この「受けるよりは与えるほうが幸いである」という言葉は、イエス様と弟子たちの言動が記されている4つの福音書の中には登場せず、聖書の中では「使徒言行録」のここだけにしか記されていない言葉です。ですから、この「受けるよりは与えるほうが幸いである」とパウロが伝えているイエス様の言葉は、彼が直接イエス様の口から聞いた言葉なのではなく、当時の教会の中で、人々の口から口へと語り伝えら

れていた言葉だったのかもしれませんが。

確かに、イエス様の生涯を思い返しますと、「人々に様々なものを与え尽くした上で、最後には自分自身の命をも奪われてしまった」ということで、この言葉はイエス様の生き様を表わしている、と理解されて来たのかもしれませんが。しかし、そもそも人に「与える」ためには、まず自分が人に与えられるだけの何かを持っていなければなりません。しかも、ガリラヤ地方の貧しい農民や漁民たちと共に、歴史の中を生きられたイエス様は、そのように人に与えられるだけの何かなんて、家畜小屋で生まれたそのクリスマスの始めから何も持っていないでいました。軍人や貴族など、支配階級の人たちであれば、豊かに持っているものの一部を、持っていない人たちに与えることは造作もないことです。それこそ大衆を支配するために、古代ローマ帝国では、人々に「パンとサーカス（食糧と娯楽）」を提供し、それによって大衆からの支持を得、人々を懐柔し、手なづけ、支配していったわけでした。ですから、この「受けるよりは与える方が幸いである」という言葉は、そのような支配階級の人々、様々なものを豊かに持っていた人たちにとっては、分かりやすい言葉であったのだらうと思います。

では、イエス様を始めとする最初期の教会の人たちは、この言葉をどのように理解したのでしょうか。そして、パウロはどのように理解していたのでしょうか。イエス様たち、ガリラヤ地方の農民や漁民たちである一般庶民たちには、もちろん余裕なんてありませんでした。仕事がなく、お金もなく、その日の食べ物にも着る物にも事欠くような生活の中で、それでも「求め続けなさい、そうすれば与えられる」（マタイ 7:7）と、諦めずに願い求め続けること、そこにこそ神様が共におられて、働かれることを、イエス様はその言葉と振る舞いを通して、伝えられていたわけです。パウロも各地の教会を回って、ひたすらお金集めをしているようにも見えますが、大きな町や都市の教会と言えども、決してお金や物が潤沢にあったというわけではありませんでした。パウロが「聖なる者たち」と言っている教会に集まっていた人たちは、何かを特別に持っていた人たちではなく、むしろ何も持っておらず、社会の中でも役に立たないとして見捨てられ、それぞれの町の中で片隅に追いやられていたようなそのような弱く小さく、貧しくされていた人たちのことでした（Ⅰコリント 1:26-30）。

ですから、この「受けるよりは与える方が幸いである」という言葉は、むしろ「受けることより、すでに受けているものを互いに分かち合うことのほうに、神様からの力

が働いている」(本田哲郎訳)と理解する方が、イエス様や弟子たち、またパウロとその周りの教会の人たちの実状に近かったのだろうと思います。そのように考えると、エルサレムの教会への献金を集めて回っていたパウロが、どれだけの献金を集め、そして届けられていたのかというと、実際の所、金額としては、それほど多くはなかったのかもしれませんが。けれども、そのような助け合い、支え合い、分かち合いの心こそが、距離も国境も、人種、身分、職業、性別など様々な障壁を乗り越えて、確かに人と人を繋ぎ、そして支えていたのだろうと思います。

私たちの教会も、先月『信徒の友』7月号の巻末にある毎日の聖書箇所と教会が紹介されている「日ごとの糧」欄に掲載されましたら、全国各地の教会や個人の方々から、50通を超えるお便りを頂いて、大変驚きました。私たちは、毎週の礼拝はインターネットで参加されている方を含めても、わずか数人という小さな小さな教会ですが、吹けば飛んでしまうようなこの久宝教会のことを覚えて、お便りをくださる方々が、全国各地にこんなにも沢山おられるということに励まされ、心温められる思いでした。この出来事もまた、お金や物を送ってもらうことではなく、今それぞれが持っているもの、思いや祈りを分かち合って、互いにつながり合っていくということの意義深さと大切さを、改めて教えてくれるものでした。

また今日もこの礼拝後に、釜ヶ崎の方々のために「おにぎり」を作って、お届けしますが、それも私たちにとって「持っているものを分かち合う取り組み」です。そして、そのような小さな取り組みを覚えて、お米や梅干しを下さったり、お金を献金したださったりする方々がおられることにも感謝です。この後に歌います『讚美歌21』499番「平和の道具と」の歌詞は、「アシジのフランシスコの平和の祈り」と呼ばれているお祈りです。実際には制作年も作者も不明のようですが、12世紀から13世紀にかけて生きたカトリックの修道士アシジのフランシスコの姿、生き様を表わしているようなお祈りとして、今でもよく聞かれるお祈りです。アシジのフランシスコが始めた修道会である「フランシスコ会」では、今でも「無所有と清貧」がその会則となっていますが、財産や物を持たないという暮らしの中で、沢山のモノやカネを使って、つまり与えることによって改善や解決を目指すのではなく、与えられていて既に今持っているものをお互いに分かち合っていくことを通して、平和を作り出していく。そこにこそ共におられる神様が働かれるということなのだろうと思います。私たちもまた、持てるものは小さいですが、それぞれに与えられているものを分かち合うことを通して、神様によって豊かに用いられて参ります。